# みなみたま

広報「みなみたま」第6号
南多摩高校閉校特集号
発　行　南多摩同窓会「あかね会」
(第四高女・南多摩高校・南多摩中等教育学校)
発行者　石 川 和 昭
〒192-8562　東京都八王子市明神町4-20-1
東京都立南多摩中等教育学校内
http://www.akanekai.org/

## 南多摩中等教育学校を新たなる母校に

南多摩同窓会・あかね会会長　石川　和昭(昭和36年卒)

３月13日、南多摩高校最後の卒業式に続き、多くの関係者の列席のもと、母校の閉校式典が行われました。もとより、高校と中等教育学校は校種が異なります。故に、単なる校名変更ではなく、母校はここにその107年の営みを終え、幕を閉じたものです。明治、大正、昭和、平成の歴史にその名を記した母校南多摩高校は、ここで改めて私達一人一人の青春の思い出と共に深く心に刻まれ、折にふれ思い出されるでしょう。

中等教育学校生も出席した式典の中で、私はあかね会を代表して、今日まで幾多の人材を輩出してきたこの南多摩高校で学んだことを誇りにして、これからの人生を歩んで欲しいと話しました。また、ここにその歴史を閉じるが、培われた校風や伝統は、南多摩の名称と共に中等教育学校に引き継がれること、２万９千余の卒業生は、南多摩高校を母体として出来た中等教育学校を新たな母校と思い、今後の発展を見守り支援を惜しまないことなどを話しました。

他方、中等教育学校生の代表からは、107年の歴史を踏まえた良き伝統と校風を受け継ぎ、更に発展させていきたいとの熱い思いが語られました。続いて行われた校旗の引き継ぎは、中等教育学校に寄せる我々の思いが、より確かになった瞬間でした。

閉校式典終了後、『南高閉校を惜しみ、「南多摩」の継承を祝う会』が、関係者160名ほどの出席のもと八王子市内のホテルで開催され、年齢幅のある同窓生が旧交を温め懐古談に耽り、時の経つのも忘れての充実した会になりました。

今後、同窓会は「あかね会」の名称をそのままに、これまで通り活動を継続してまいります。会員の皆様には今後、中等教育学校を新たな母校とすることと併せ、引き続きあかね会活動へのご理解とご協力をお願い申し上げ、挨拶といたします。

# あり方生き方の刺激を期待

東京都立南多摩中等教育学校　校長　押尾　勲

同窓会は百年を超える歴史を持っています。それゆえ、人生のモデルとなる方々がたくさんいらっしゃいます。あかね会主催の「先輩に学ぶ」の事業では、多くの先輩が学校に足を運び在校生に刺激を与えてくれています。昨年末には、あかね会顧問で前八王子市長の黒須 隆一氏による講演会が行われました。氏の話の中に、「あきらめないこと」、「失敗を恐れないこと」、「チャレンジ精神を発揮すること」が人をより高みに引き上げるというお話は、中等生たちの次のステップで生かされるお話であったと思います。

４月からは校名が南多摩中等教育学校ひとつになります。中等生たちも現南高生に負けず劣らず、多彩な才能を発揮しています。運動の才能が飛びぬけている生徒、音楽の才能を発揮している生徒、バレエで身を立てようと挑戦している生徒、学術面で才能を発揮している生徒‥‥。実に面白い生徒たちが後に続いています。在校生は、一人一人「異なる」才能を発揮しはじめました。その才能を生徒同士が認め合い、励まし合うことで、その才能はさらに伸びていくことになると思います。

「あきらめない」、「失敗を恐れない」、「チャレンジ」の精神で、こつこつ実績を重ね、自分の仕事で大成してくれるものと思います。

「事成る」高みまで到達することでしょう。その時、大勢の人の中で輝く南多摩生としての「個」が確立したと言えます。この長い道のりの途中々々で、モデルとなる先輩南高生からの助言が、逞しく道を切り開く励みとなります。在校生の人生に少なからず刺激を与え続ける「あかね会」のみなさまの変わらぬご支援をこれからもお願い申し上げます。　（前南多摩高等学校校長）

# 最後の卒業式と南高閉校式典

南多摩中等教育学校　副校長　吉田 寿美

３月13日（金）の良く晴れた日。本校最後の卒業式そして本校の閉校式典が、体育館で挙行されました。本校卒業生や同窓生の方々の思い出が沢山詰まった本校で卒業式や閉校式典を行い、皆様に現在の本校の様子を実感していただきたいという思いから、式典会場は本校体育館となりました。

当日は、大勢の来賓の方々がいらしてくださいました。以下、当日の流れを、時間経過に伴い綴っていきます。

## 1　最後の卒業式（9時30分開式）

【卒業式式次第】

- 開式の辞
- 国歌斉唱
- 校歌合唱
- 卒業証書授与
- 校長式辞
- 東京都教育委員会挨拶
- 来賓祝辞
- 来賓紹介
- 送辞
- 答辞
- 送別の歌
- 卒業の歌
- 閉式の辞

「ただいまより、平成26年度東京都立南多摩高等学校全日制課程第67回卒業式を行います」。この言葉とともに、本校最後の卒業式が始まりました。本校最後の卒業生となる151名に、校長から卒業証書が授与されました。

式典では、東京都教育委員会や本校ＰＴＡ代表、本校同窓会会長から御挨拶を頂きました。

また、中等５年生女子生徒の送辞、高校３年

生女子生徒の答辞では、南高生の何事にも仲間と一緒に精一杯挑戦する姿が浮かび上がり、更に高校生から中等生へ「南多摩」は引き継がれていくことも確信されました。入退場の演奏は南多摩フィルハーモニーが行い、卒業式を盛り上げてくれました。

## 2　南高閉校式典（11時30分開式）

閉校式典開式前に、アトラクションとして、太鼓部による「八多化（やたけ）の響き」、南多摩フィルハーモニーによるドヴォルザーク作曲「交響曲第８番第４楽章」の演奏が行われ、閉校式典会場は華やかで厳かな雰囲気に包まれました。

【閉校式典式次第】

- 開式の辞
- 国歌斉唱
- 校長式辞
- 東京都教育委員会挨拶
- 同窓会会長挨拶
- 来賓紹介
- 代表生徒の言葉
- 校旗の引継ぎ
- 校歌合唱
- 閉式の辞

式典では、東京都教育委員会や本校同窓会会長から御挨拶を頂きました。そして、中等５年生女子生徒と高校３年生男子生徒による代表生徒の言葉では、107年間に

渡る本校の長い歴史と伝統を築いた諸先輩方への感謝の思いと、これからも「南多摩」を引き継ぎ発展させてほしいと願う高校生の願いとその思いに応える中等生の決意が語られました。

続けて、南多摩高校の校旗を高校３年生男子生徒から中等５年生女子生徒に受け渡す校旗の引継ぎも行われました。校歌合唱では、同窓会の御支援によりオーケストラ演奏用に編曲した本校校歌を南多摩フィルハーモニーが演奏し、それに合わせて会場全員で校歌を歌いました。

## 3　閉校記念碑の除幕式（13時開始）

本校同窓会から寄贈された「南多摩閉校記念碑」除幕式が行われました。あかね色の御影石の記念碑表には、本校校歌の言葉「美わしく　逞しき　南多摩」の文字が刻まれています。

## 4　南高閉校を惜しみ『南多摩』の継承を祝う会

本校ＰＴＡと本校同窓会共催で、母校近くの八王子ホテルニューグランドで16時から開催されました。

## 5　閉校記念誌の刊行

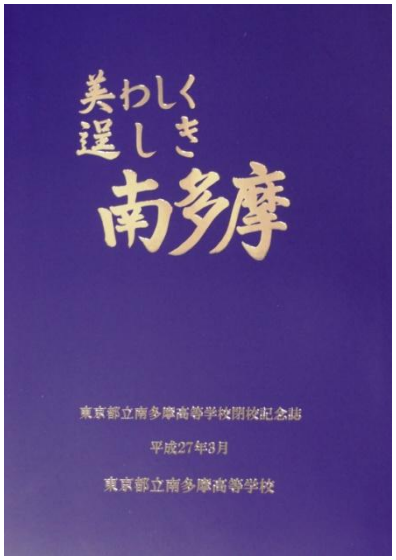
平成23年度から、学校の様々な場所から、様々な関係者から、閉校に向けての資料収集を行いました。長い歴史と伝統を誇る本校を閉校するにあたって、ここで資料をひとまとめにしておかなければ…という使命を感じて、資料収集を行ったと言ってよいかもしれません。そして、本校に関わる大勢の方々への原稿依頼。皆様方が原稿執筆を快く引き受けてくださいました。

完成した閉校記念誌について簡単に御紹介致します。表紙は、本校の校旗にも使われている八王子を象徴する桑をイメージした桑の実色（マルベリー色）にしました。さらに表紙には、卒業生の女子生徒の自筆による校歌の歌詞の一部「美わしく　逞しき　南多摩」が載っています。

「美わしく　逞しき　南多摩」の言葉は、閉校記念碑の表面にも刻まれています。

そして表紙を開けると、「意欲的であれ　連帯を深め

よう　当事者として世に立とう」という南多摩高等学校の教育目標の頁が続きます。記念誌の内容ですが、校歌、校旗、校章、歴代校長、本校のオオクスノキや閉校記念碑の紹介、学校関係者の原稿、本校の現在の状況や沿革、海外帰国生徒学級、広報、定時制課程、想い出の写真から構成されています。




閉校記念誌委員会のメンバーは、高等学校副校長の私（吉田）、本校卒業生でもある西海先生と見田先生、平成26年度卒業学年担任団の原先生の計４人です。また、同窓会の野口冨巳子さん、菱山剛秀さんからも大いなる御協力を頂きました。多くの方々の御協力により閉校記念誌が完成しました。本当に有難く思っております。

## 6　ＰＴＡ・同窓会の支援に感謝

３月13日の南多摩高校閉校に向けて、学校、ＰＴＡ、同窓会と三者が一体となって準備を行って参りました。このような皆様方の協力体制に支えられて、13日の様々な行事を無事に進めることができました。付け加えて、閉校に伴い、閉校記念誌や「東京都立南多摩高等学校」の名称と校章が記されたブックカバーの閉校記念品も作成されましたが、この作成にあたっても、ＰＴＡ、同窓会から御支援を頂きました。この場を借りて、御礼を申し上げます。

「南高が閉校するのは寂しい。でも、『南多摩』は引き継がれていくので嬉しい」。式典当日に、この言葉を多くの方々からうかがいました。まさに、その通りなのだと思います。過去から現在、そして未来へ、これからも『南多摩』は続いていきます。

（前南多摩高等学校副校長）

# 記念すべき卒業式と閉校式典に参列して

**元創立100周年記念事業実行委員長　常盤　正臣(昭和31年卒)**

## 1．感動した素晴らしい最後の卒業式

平成26年度「第67回南多摩高等学校卒業式」に出席させていただいた。式全体の中で強く印象づけられたことがあった。それは生徒たちの整然とした姿であった。

私は仕事の関係で、いろいろな学校の卒業式に招かれる機会があるが、「これぞ最高」と思える感動的な卒業式に出席したことがある。それは小中高一貫の学園で、自閉症児と健常児が共に学ぶ、特別な教育理念を持つ私立の学園で、規律が厳しく、道徳面においても他校とは比較にならないほど統制のとれた校風の学園なのである。その学園の卒業式の出席者は、生徒たちの規律正しく整然とした姿に心打たれ、異口同音に「素晴らしい。感動した」と感想を述べ合うのである。

当日の母校の卒業式でも、「素晴らしい。感動した。」の声を多くの方々から耳にした。特に、在校生を代表して中等５年の女子生徒の送辞は素晴らしかった。「南高の先輩に学びました。“懸命に努力し、助け合い、仲間を信じ、真の友をつくる”　その伝統を受け継ぎ、より高い志を持って、南多摩中等教育学校をつくっていきます」と固い決意が述べられたのである。

次に多くの出席者の心に、胸の思いを届かせ、涙を誘ったのが卒業生代表で高校３年の女子生徒の答辞であった。答辞を述べる瞬間、万感胸に迫るものがあったのか、声を詰まらせ､涙、涙の答辞を述べる姿には胸を打たれ、私は熱いものが込み上げてきた。その言葉の中に、「友を思う心。恩師や親への感謝。また、どんな時にも全力を尽くすこと。それが自分の将来の道標となる。更に、この伝統ある南多摩高等学校で学ぶことができたことを誇りに思う」と語られ、仲間と勉学に勤しみ、文化祭や体育祭などの行事で苦楽を共にした思いが、ひしひしと伝わってきたのである。この答辞に大勢の出席者から、「素晴らしかった。感動した」との声が飛び交った。

送辞は、在校生たち全員からのメッセージであり、答辞は、卒業生たち一人ひとりからの３年間の思いが語られ、母校への感謝の気持ちがしっかり伝わってきた。こ

れは、先生方の教育への熱意と努力と情熱の成果だと思う。

「鉄は熱いうちに打て」。これこそ教育の原点であるように思う。素晴らしい生徒たちを育て上げられた先生方に心から敬意を表し、感謝を申し上げたい。

## ２．閉校への思いは新たな出発への祝福に！

開式直前に南多摩太鼓の迫力ある演奏が始まり、卒業式とは全く違う雰囲気の中で、都立南多摩高等学校の閉校式典が始まった。

押尾校長先生から、南高の前身である府立第四高等女学校から都立南多摩高等学校となった経緯や、南高の歴史秘話とも言える、私たち南高の関係者でも、しっかりと理解されていない学校の歴史、史実が語られた。私立八王子女学校創立者の横川楳子先生の功績について皆様はよくご存じであろうが、府立第四高等女学校設立に不可欠の条件である校地提供者のことは、よく知られていないのが現状ではないだろうか。押尾校長先生から、「本校の広大な土地は、新藤家（あかね会相談役の大島富子さん、松本陽子さんの実家）から提供されたものです･･･」と詳細説明があり、出席者の大島富子さんが式場で紹介されたのである。さぞや、提供者の新藤ナツさん(大島富子さんの祖母)は空の上で喜ばれていたのではないかと思われた。改めて感謝申し上げたい。

引き締まった式典の雰囲気の中、卒業生代表として高校３年の男子生徒から、母校への感謝を込めたスピーチがあった。「八王子大空襲で焼けたクスノキは、焼けた跡から芽を吹き、苦境を乗り越え、現在、大きなクスノキとなって私たちを見守ってくれています。その生命力と根性を模範とし、私たちは人生をしっかり歩んで参りたいと思います。私たちは卒業し、南多摩高等学校は閉校となりますが、もうすでに南多摩高校は中等教育学校に生まれ変わったのだと思います。後輩の皆さんは互いに連帯を深め、あらゆることに意欲的であれと願います。そして、新たな歴史づくりに努力して欲しいと思います」と力強く語った。

その後、在校生を代表して中等５年の女子生徒のスピーチが続いた。「７年前に挙行された南多摩高等学校創立100周年記念事業の記念誌『湧水万古』を読み感動しました。その中に、先輩の皆さんが学校に対して、たくさんの思いを抱かれ、卒業後何年経っても、それを忘れずに居ることを知り、改めて南高の歴史の深さと学校の大きな役割を感じました」更に、「私たちに課せられた課題は、南多摩高等学校で培われた歴史と伝統を継承し、更なる進展をしていくことが重要な使命であると考えます」と締めくくった。

『湧水万古』に刻まれた、私たち同窓生の思いが、後輩たちの心の中に花開いたことは、まことにうれしい限りであった。

次に、高校３年の男子から中等５年の女子生徒へ校旗の引き継ぎが行われた。閉式間近になると、会場の後方２階席から南多摩フィルハーモニーによる校歌のオーケストラ演奏が始まった。初めて耳にするその壮大な音色は、私たちの胸に熱く大きな感動をもたらした。これで閉校する母校に心を込めて最敬礼すると同時に、南多摩中等教育学校のますますの発展を心から祈念した。

## ３．創立100周年記念事業の協力者に感謝

記念誌『湧水万古』を生んだあの南多摩高等学校創立100周年記念事業に携わった学校、ＰＴＡ、あかね会の130人を超える実行委員のメンバーが、５年間の長きにわたり努力し、協力し合って素晴らしい奉仕活動を行った。そして、すべての基盤となった募金にご協力くださった3200余名の方々のおかげで母校創立100周年記念事業が成功した。

100周年を祝う生徒たちによる人文字

今後も残した浄財が、母校支援の一助として活用されることは、この事業に携わった人たちの大きな喜びであり、学校への感謝の印、恩返しの一つとなればと心から願うものである。

「南多摩高等学校」ありがとう！

# 閉校記念碑の建立と「南多摩」の継承を祝う会

３月13日―――

明治41年、多摩地区で初めての公立女学校「東京府立第四高等女学校」が誕生してから107年目のこの日は、数々の南多摩高等学校の閉校関連行事が催されました。

平成22年に東京都の教育改革により南多摩中等教育学校が開校して南多摩高校内に併置され、この５年間は移行期間として同じ校舎で２つの学校が授業を行ってきました。入学式をはじめ、合唱祭、文化祭、体育祭といった三大行事も両校合同で開催してきました。

この日はまさに大安吉日、一日中が“南高デー”といった様相で、朝から南多摩高校最後の「第67回卒業式」、続いて「南高閉校式典」が体育館で行われました。

## あかね色に輝く「南高閉校記念碑」建立

午後からは太鼓部の演奏する「南多摩太鼓」が鳴り響くなか、南高が存在したことを後々まで語り継ぐ証としてあかね会が寄贈した『南多摩高校閉校記念碑』の除幕式です。押尾勲校長、吉田寿美副校長、早川剛生都立学校教育部長、石川和昭あかね会会長、大島富子あかね会相談役５名が紅白の引き綱を手に除幕しました。大島さんの祖母にあたる新藤ナツ女史は、府立第四高女設立時に土地提供を申し出た南高ゆかりの方で、その娘(母)も第四高女を、孫にあたる彼女や妹も南多摩高校の卒業生です。

今回、書道家である大島さんの麗筆により、あかね色の御影石碑に校歌の一文『美わしく　逞しき　南多摩』の文字が刻まれ、通用門の横川楳子(うめこ)像の前に建立されました。

## 南高閉校を惜しみ「南多摩」の継承を祝う会

夕方からあかね会と南多摩ＰＴＡ共催により、『南高閉校を惜しみ「南多摩」の継承を祝う会』が母校近くの八王子ホテルニューグランドで、来賓、学校、ＰＴＡ、同窓会関係者など160余名が出席して開催されました。今回は同窓会広報やホームページで会員に広く参加を募りました。新たな学校に移行する場合、校名が全く変更されることも数あるなかで、母校は「南多摩」の３文字が校名に残り、伝統ある校章の桑の葉の図柄、そして校歌もそのまま継承されたために、会名がこのような長い名称になりました。

この会は本来は南高との惜別会でもありますが、出席者の面々は何故か悲壮感はなく笑顔満開です。太鼓部の迎え太鼓が響きわたり、母校の伝統と歴史を次世代に受け継ぐという決意が、関係者の方々の挨拶に込められていました。

引き続き、ソプラノ歌手「田中三佐代コンサート」での美声あり、南高50周年、100周年の懐かしい映像あり、

若き日の南高の想い出を語る会員ありと盛り沢山の内容で、会場は「南多摩」継承を祝う会一色になりました。

３年制の南多摩高校は３月で閉校となり、４月からは６年制の南多摩中等教育学校にその伝統は継承され、南多摩は108年目となる

新しい歴史を築いて行くことになります。

同窓会「あかね会」も、来春には南多摩中等教育学校の第１回卒業生を会員として迎えるとともに、今後も新しい母校として支援していくことを改めて確認しました。

（広報）

# 南高の思い出

## 何も見えなかった時代

**田宮 勝代** 昭和20年本科卒

２年生になっていた12月８日の朝。「太平洋上に於いて米軍と戦闘状態に入れり。」というラジオ放送が流れた。それがどういうことなのか、私たちは理解も納得もいかなかった。しかし、日を重ねることで日々の生活に変化が起こり始めた。生活用品が無くなり始めた。

３年生になる時、教科の選択で私は英語を選んだ。しかしまた、４年になる時、英語のクラスは１組となることになった。それは、「敵国語」を使うなという考えらしかった。私は英語のクラスに残った。

５年生になったとき、「学徒動員」という仕組みができあがっていった。国民総動員ということである。二つのクラスは日立の工場での作業となったが、私のクラスは学校に残った。軍需工場から派遣された女の方の説明によると、「飛行機に搭載するレンズの収差の計算」ということであった。 今考えてみても、「あれは何の役に立ったのか」無駄なことであったとしか思えないのである。

校門の前に立ち、西の方へ向かって延びる甲州街道を望むと、八王子市街も全滅し瓦礫が積み重なり、廃墟となっていた。校舎も焼失した。昭和20年８月２日未明、そして、８月15日。終戦を迎えたのである。

## 南高の文芸部から

**仏教詩人 尾崎 文英**（ぶんえい） 昭和29年卒

あの頃、都立南多摩高校の校長は３代岩崎源兵衛先生、続いて４代山下清先生でした。私はクラブ活動では生物部と文芸部に所属、自宅から学校まで自転車通学、雨の日は徒歩でした。校舎は木造、衣食住に事欠いている時代でした。国語の授業で大谷静枝、桜井勝美先生から大いに刺激を受け、文芸部誌の「断層」で俳句に親しんだことを思い起こします。

このあと立正大学国文学科に進学、仏教と国文学を学びました。卒業記念に句集『美しき四季』を光炎社から出しております。十代の作品が入っています。

句集『美しき四季』

詩歌は生きている証、人間愛を感動的に謳う文学です。その要を私は南高で学んだように思います。私は八王子高等学校教諭を経て、日朝寺住職となっていますが、南高で培った感性はわが人生に常に新鮮です。南多摩高校に感謝です。

著作の幾つかを記します。

歌集『遠近』（甲鳥書林）
『私の詩歌論』（揺藍社）
歌集『戒壇』（近代文芸社）
句集『久遠』（近代文芸社）
『詩心佛心』全３巻（ニチレン出版）
歌集『光となりて』（短歌草原社）
句集『一如』（創流出版）
『金子みすゞ いのちのうた』（JuLA出版）
詩歌集『延命橋』（揺藍社）
句集『觀自在』（創流出版）

## 皆さんの声！そして富士は日本一の山！

**村内 絹江（向山）** 昭和37年卒

「南多摩高校卒業！？」「優秀なんですね？！」

必ず言われます！心の中では「そんなことない･･･」と思いながら。やはりうれしい！

八王子に生まれ、八王子に育ち、現在も八王子在住で、八王子とともに一生が過ぎそうです。（＾＾）

日本一の「富士の山」も毎日見られるこの八王子！その富士山を眺め大きく深呼吸して一日が始まる、そんな毎日を過ごしている私です。

その「富士は日本一の山」とうたわれる富士山に夏季教室で登りました！今とは違い五合目まで歩き、そこで宿をとり友人たちと重なり合って雑魚寝し、夜には満天の星を眺め乙女心にその素敵な澄んだ空に感動を覚えた。（今も星空を眺めるのが大好きです！）

仮眠をしていよいよ頂上をめざし列をなし、「上を見ず足元を見て一歩一歩進め」と先生のご指導があった。

少しでも速く頂上につきたいと夢中になり高山病になりかかった友人もいた。私もまた先生のその言葉を聞かず頂上をめざしどんどん登って行ったことを思い出す。

そこに立った喜びは何にも代えがたい喜びであった！

雲海が眼下にあり仙人になったような気分だった「南高の想い出」です。

特に冬の富士山は、真っ白に雪化粧をして朝日をあびて赤く染まり、それはそれは言葉に表せないほどです！

そんな富士山を毎日眺められる、なんと幸せなことか！

そんなことをひしひしと感じる年齢になりました。

# 南高の想い出

**福島 雪男** 昭和35年卒

私が南高に入学した頃は校舎が甲州街道(現:国道20号線)に面しており、正面入口には創始者の横川楳子先生の像がありました。建物は平屋建てでコンクリート瓦でした。この銅像の近くには小さな池があり心和む雰囲気の中にありました。

ここを通る度に、これから新しい知識を学べるのだと思いながら教室に向かいました。当時は都立第四高等女学校（高女）から都立南多摩高等学校（南高）に変わって間もないので、女子高の雰囲気を残して兎に角、女子の力が強かったのです。生徒比率は女子３に対し男子は１でしたので、男子は１／４という将に女の園でした。

私が入学して一番困ったのはトイレでした。廊下の一番東の端、１年１組の隣にあり、私は１年３組で３番目の教室でした。ところが休憩時間には廊下の両側に女子生徒が立っていてその真ん中を通らねばなりませんでした。当時は恥ずかしい年齢で、この女子の列の間を一人通るのはとても勇気の要ることでした。従って、出来るだけトイレに行かぬような工夫と、行く時は廊下が空いている時を狙って行くのです。帰りも下を向いて女子の視線を避けて通ると言う、今にすれば信じられない心理状況でした。でも数ヶ月もするとそれに慣れ余り意識せずトイレに行けるようになり、ようやく勉学に集中出来るようになりました。

また、雨の日は賑やかな教室に変身します。古い教室ゆえ雨漏りが酷く教室の所々に雨水が落ちてきます。そのためバケツを５～６個雨水の落ちる所に置きます。当時のバケツはブリキで出来ていたので雨水の落ちるたびに大きな音がします。トン、チン、カンと賑やかです。そして雨がトタンの底で跳ねて机に飛び散ります。そこで工夫、バケツの底に雑巾を入れる事が雨水が飛び散らない智恵だったのです。こうして、私は色々なことを学びました。

学校全体では３／４が女子生徒なのでクラス委員は殆どが女子でした。当時、視覚教室といって映画を上映して下さり、その希望を募るのですが、男子希望のアクション物は選ばれず、いつも恋愛物や心を休めるようなドラマに決まってしまいます。

いつの間にか我々男子は「女性化」して、同級の女学生は市内の男子校の生徒に眼が向く有様でした。それでも、２～３年（クラス換えなし）の８組は校内で最も男女仲が良いと噂されました。確かに、そうでした。

校外活動では、クラス全員で多摩動物公園完成前のハイキングや、中津川渓谷の川遊びなど青春そのものでした。当時は制服で行きましたので男子の水着をつけるのは問題ないのですが、女子は隠れる場所がない河原の真ん中でどのように着替えるのか心配しましたが、女子は問題なく少ししゃがんでジャンパースカートを着替え室のように上手に更衣されるのには驚きました。このような中で映画「青い山脈」のような、本当に純粋な青春時代が醸成されました。

最後に担任の加藤先生が私たち高校時代を最高のものにして下さいました。先生は広島県尾道出身で、当時大学を出てすぐに私たちを担任して下さったようです。後で分かったのですが先生と私達の年齢差は多分７年位でしょうから、人生全体では先輩と言った年齢差だったと思います。先生は尾道訛りの言葉で話されるのですが、これが独特の味になって一層親しみを感じました。私達学生は先生を最高に尊敬していましたのであくまでも大先生でした。この先生が私達の愚挙に対して大変寛大で、私達は益々先生を好きになりました。

以降、時々クラス会を開いて先生をお招きし、青春が継続していました。残念ながら、先生は数年前に他界され、年と共に私達の遠い記憶になりつつあります。沢山の青春を下さった加藤先生に感謝しつつペンを置きます。ありがとうございました。

# 「地歴部」との出会い

**元地歴部部長 佐藤 彬** 昭和38年卒

八王子には古代の遺跡がたくさん眠っている。かつて南多摩高校には「地歴部」という遺跡を発掘するクラブ（部活）が存在した。当時は東京オリンピックを控え、これから高度成長に入る時代だったので、宅地開発が始まる前に、各地で遺跡調査が盛んに行われていた。

夏休みに入ると八王子近郊に毎日出掛け、遺跡の発掘に精を出した。地歴部も女性部員が多く、数少ない男生徒は決まって力仕事。まだ、あどけない女生徒たちは、住居跡から土器の破片を見つけることに務めた。顧問は日本史の中村威先生で、八王子工や二商、富士森と緊密に連絡を取りながら、高校としては大きな成果をあげていた。当時、新聞の多摩版には、発掘記事が写真入りでよく紹介された。

秋の文化祭には発掘した破片をまるでパズルのように組み合わせて完成した縄文式土器を展示し、車人形や獅子舞など地元八王子の郷土芸能を調査し実物を展示した。その後、中村先生とは３年前の「昭和44年卒地歴部同期会」に出席されたとき、八王子でお会いして元気なお顔を拝見することができた。

現在、地歴部は存在しないが、母校には遺産として土器や石器が多数残っている。

今年、南高が閉校する。私の人生も地歴部なしには語ることができない貴重な体験をさせてもらった。そして半世紀以上たった現在も、４人の地歴部員との親交は続いている。

土器を前に地歴部の女性たち

# 南高の想い出

**稲垣 元喜** 昭和42年卒

卒業して、近く半世紀が経とうとしています。

私の場合は、1964年東京オリンピックの翌年に、父の転勤に伴って北九州市から南多摩高校に転校してきました。

編入学の難しい時代でしたから北九州の高校を卒業する予定でしたが、１年生を終えた春休みに東京見物を兼ねて上京したところ、たまたま編入試験があったので受けたという経緯です。幸いに転校が叶い、家族が分かれて暮らすことから免れました。

九州の高校では、頭髪が坊主だったのを長髪に、ズックと肩掛けカバンだったのが革靴に革鞄を手にすることを許されました。

また、九州では進学のための補習が、毎朝夕に強制的でした。しかし、南多摩では補習受講は各自の自由だったはずで、受け続けたものの拘束から解き放たれた気分を味わえ、東京は随分と自治が進んでいると感じました。

さらに、学生服に学帽を被って登校していましたが、翌年３年生からは学帽を被るのが自由になったことを思えば、ちょうど服装面の端境期であったらしく、われわれの卒業後に私服通学になったようです。

男子向け武道は、剣道か柔道を選ぶところを南高では柔道だけだったため、九州で剣道を専攻していた私は柔道も体験することができました。その上、武道の冬季１週間を裸足で寒稽古することからも解放されました。

そんな個人的な背景がありましたから、校風は自由闊達な印象を余計に強く意識することができました。

在学中に、アニメの『オバケのＱ太郎』が視聴率30％以上の人気でした。しかも、声優の曽我町子さんは、我が南多摩高校の卒業生で、彼女が歌った「オバＱ音頭」は、レコード200万枚の大ヒットでした（主題歌「オバケのＱ太郎」はミリオンセラーを記録し、昭和41年の日本レコード大賞童謡賞を受賞）。

そうでした、いまは南多摩高校の愛称を「南多摩（なんたま）」というようですが、われわれの時代は「南高（なんこう）」と呼んでいました。南高を「みなみこう」と呼ばずに、楠正成を連想する「なんこう（楠公）」なのをお洒落に思いました。

思えば、わが人生において南多摩とのご縁はターニングポイントになりました。そんな団塊世代の時代でした。

昼休みのベランダ（卒業アルバムより）

# 生涯スポーツ卓球との出逢い

**八王子市卓球連盟理事長 馬場 正洋** 昭和49年卒

今でこそ福原愛選手や、石川佳純選手がマスコミにも取り上げられるようになり、メジャーなスポーツになってきましたが、当時は卓球のイメージが暗いという風潮がありました。

しかし、わずか2.５ｇのボールを至近距離で打ち合う面白さに惹かれた私は卓球部に入部して、夢中で汗を流しました。入部した頃は先輩も厳しく、部員数もかなりいました。

自分の練習時間を確保するため、朝練はもちろん、昼休みもボールを追いかけました。

南多摩高校は当時、定時制がありましたので、夕方からの授業のために体育館も遅くまで使えませんでした。私立高校の強豪校には専用の卓球場があったり、コーチがいたりと恵まれた環境で練習している所もあります。反骨精神もあり、そういう学校の選手に負けたくないという気持ちもあり、部活終了後は民間の卓球場に通いました。

その甲斐あって３年生の春、群馬県前橋市で開催された関東高校卓球選手権に、東京都予選を勝ち抜いて代表となりました。本大会はクラブメートも自費で応援に来てくれましたが、２回戦で敗退してしまいました。遠征で２日ほど学校を休んだのですが、クラスメートからは体調が悪くて休んだと思ったと言われました。（笑い）

マイナーなスポーツだったのがよくわかりますね。

クラブメートや先輩諸氏、試合で知り合った他校の選手も多く私の財産と思っております。

ここ数年で２回、南多摩高校卓球部ＯＢ会を開催しました。直接同じ時期に所属していなくても懐かしく昔話に花を咲かせ、楽しい時間を共有する事が出来ました。継続して開催できればいいなと思います。

同じ卓球部で過ごした女子部のエース、旧姓・谷佳津子（昭和49年卒）と卒業数年後に結婚して現在に至っております。

夫婦そろって未だにラケットを持ち、生涯スポーツとして楽しんでいます。

卓球と出会い、仲間と出会い、生涯の伴侶に出会う事ができた高校時代。全てに感謝です。これからも楽しみながら付き合っていきたいと思っております。

スポーツに限らず、多方面で南多摩高校出身者が活躍されていると聞くと嬉しく思います。根幹には高校時代が、それぞれにあるのでしょう。南多摩、ありがとう！

# 歌を歌って 若く、美しく

**テノール歌手、合唱指導者　丸山　久** 昭和44年卒

私は、現在、８つの童謡を歌う会と合唱団を指導し、自宅には童謡館を併設し、大学での公開講座や様々なコンサートを行っています。

大正７年、鈴木三重吉の「赤い鳥」創刊に始まった童謡運動が、間もなく100周年を迎えます。童謡・唱歌は単に子どもの歌というにとどまらず、大人の感性に訴える「心のうた」です。戦前から、アメリカなど海外でも受け入れられている、世界に通ずる日本の歌です。しかし、これを研究するにあたってはその文献に誤りも多く、悩まされてもいます。

童謡・唱歌の歴史について、持論が幾つかあります。①大正ロマンの童謡作家（北原白秋、野口雨情ら）の評価や知名度が高いのに対し、学者であり文部省入省後に学校唱歌を作り、その最高峰を極めた高野辰之（詞）、岡野貞一(曲)に対する評価や研究が少ないのです（「故郷」「おぼろ月夜」「紅葉」などの代表作品がある）。②大正ロマンの竹久夢二（宵待ち草）、加藤まさお（月の砂漠）らの美少女絵画ブーム（童謡も産み出した）の原点が、明治38年の日露戦争に解禁された絵ハガキの美人画ブームにあるのではないかと思います。

童謡を歌う会、合唱団ともに、高齢化の波が進んでいますが、皆さんお元気です。88歳の女性が声楽の勉強を始め、ソプラノとしてオペラを歌う例もあります。

皆さんの人生は、想像以上に長く充実したものになる可能性があります。皆さん、歌を歌って、若く美しく元気に過ごしましょう。「熟年の夢、万歳」です。

# ありがとう南高

**門倉　俊明** 昭和55年卒

南高へ入学した昭和52年は、王選手が当時の世界新記録となる通算756号の本塁打を放った年で、「渚のシンドバッド」や「勝手にしやがれ」「失恋レストラン」が流行り、映画では「男はつらいよ」「トラック野郎」が全盛でした。

そんな年の４月、人生初めての受験を経験し、希望に胸を膨らませ･･･と言いたいところですが、志望校受験に失敗、２次募集で入学したこともあり、これから３年間楽しく過ごせるのかと不安を抱えながら正門を潜りました。

目前に古い３階建て鉄筋コンクリート造りの校舎がありましたが、１年生は木造２階建てで勿論エアコンもなく、夏は窓を開け天然クーラー、冬はダルマストーブで暖を取るといった昭和そのままのレトロな環境でした。また、私達の入学に合わせ制服になり、男子も黒の詰襟からブレザーへの転換が主流だったものの、渋めのグリーンの制服は南高生だと一目で判ってしまい正直好きではありませんでしたが今では懐かしく思えます。

教室の窓側最後部席に好んで座っていた私は、校庭に目をやったり、キッチリ閉まらない木製枠のガラス窓の隙間から吹き込む寒風で眼を覚すこともしばしばありました。卒業を間近に控えた３学期、ほんのわずかな期間でしたが綺麗に建て替えられた木のいい匂いがする新校舎を一番乗りで使うことが出来たものの、正直もっと早く建て替えてくれていればと恨んだものでした。

当時の都立高入試には郡制が設けられ、南高も３校で構成されるグループの中にありました。合格しても南高を自分の意思では決められないという中、縁あって出会った仲間や後輩達、当時の先生方と今でも交流させていただいていることに感謝しています。

現在、私の勤務する職場には１歳上の野球部に所属していた先輩と１つ下で演劇部の後輩がいます。私が２年時の南高３学年が同じ職場にいることになります。また定年で退職された先輩方にも、ひと回り以上歳の離れた後輩も要所のポジションで活躍しているのを嬉しく思うと同時に南高の歴史の重さを感じます。

さてさて、部活帰りに立ち寄ったおでん屋のおばちゃんや様々なことが蘇り、また皆と会いたくなってきましたのでこの辺りで･･･。

結びになりますが、過去と現在と未来、時を繋げてくれる南高。人を繋いでくれる南高。南高生で本当に良かった。ありがとう！都立南多摩高等学校！

# 人生の反面教師となった高校時代

**けん玉師 伊藤　佑介** 平成10年卒

南多摩高校時代は、けん玉と自分に自信が持てない時でした。入学をしてはじめに「けん玉をやりたいので、私は部活に入りません」と、何の説明もなくクラスで言ったんです。

この時、自分が卑屈になっていたんだと思いますが、クラスメートが自分から引いていったように感じてしまったことを覚えています。授業が終わると家に真っ直ぐ帰り、けん玉の練習に明け暮れていました。

７歳から地元日野市の「けん玉道場」に通うようになり、ますますけん玉が好きになりました。６年生で文部大臣杯（現・文部科学大臣杯）をもらい、小学校の卒業アルバムに「一生、けん玉を続けたいから、土・日が休みの会社に入る。」と書きました。その気持ちは高校に入っても変らなかったのですが、昔遊びの一種であるけん玉が好きだなんて言ったら、変な人と思われるんじゃないかと思い、自分を表現できなかったのです。

幸いけん玉で培った集中力と持続力で大学に合格。大学で自分を表現していけば仲間も増え、自分に自信が持てるようになることを学びました。逆に言えば、この南高時代の「青春の悩み」があったからこそ、プロとして初のけん玉師になる勇気が持てたと思いますので、南高に感謝をしています。

# 南多摩高校での思い出

**和田 安代** 平成14年卒

私が2002年３月に南多摩高校を卒業して早くも13年が経とうとしています。高校では、多くの素晴らしい先生方や友人達と出会う事ができ、勉強においても私生活においても充実した３年間を送ることができました。心より感謝申し上げます。卒業後は大学、大学院、米国での仕事、日本での仕事と、休むことなく過ごして参りましたが、自分の好きな分野で社会や人の役に立てるような人生を歩みたいと考え、その準備段階であり、道筋を示していただいた期間が高校での３年間でした。

理系文系問わず幅広く様々な事を学び、個性豊かな人材が集まる学校で、多様性を享受する重要性を感じ、その後の人生において大きな糧になりました。南多摩高校が閉校になることは寂しいですが、南多摩の歴史は受け継がれていくものと存じます。今後も卒業生の一人として、精進努力していく所存でございます。

# 南多摩高校の思い出

**鳥屋部 大河** 平成27年卒

「高校生になったんだなぁ」と初めて実感したのは、入学時の部活紹介の時でした。中学にはない先輩たちの活気溢れた雰囲気に圧倒されたことが、昨日のことのように思い出されます。

入学してからの最初の１年間は、初めての経験ばかりで、驚きや戸惑いの連続でした。なかでも一番印象に残っているのが、南多摩高校の二大祭典である『南魂祭』です。

文化祭の準備は夏休みに部活の有無にかかわらず、みんなで集まって案を出し合い、少ない予算を工夫して、よりよい出し物にしようと頑張りました。みんなで協力してひとつのものを作り上げることはとても大変でしたが、同時にその喜びを味わうことができました。

また、先輩方の出し物の質の高さに感動し、来年はもっとよいものを作りたいという意欲も湧きました。

体育祭では各団が学年を超えて団結し、優勝を目指しました。応援団に参加し、苦手な踊りにも挑戦しました。普段関わることのない先輩と一緒に練習ができたのも、とても貴重な経験になったと思います。優勝こそできなかったけれど、達成感を感じることができました。

『南魂祭』は２年、３年の時も同様、みんなで協力しあって、その時にできる限りのものを創り上げていきました。思うように進まず、イライラしたり、忙しくて投げ出したい時もありましたが、最終的には「頑張ってよかった」と思えるほどの充実感、達成感に繋がりました。

南多摩高校に３年間通い、何事にも一所懸命で、けじめのある「南魂」を学びました。この「南魂」の精神を忘れずに、今後も歩んでいきたいと思います。そして、100年以上も続いた南多摩高校の歴史と伝統を受け継いだ南多摩中等教育学校が、新たな歴史と伝統を築いていって欲しいと願っています。

# 厳格さの中の明るい学校

**相沢 健夫** 元南多摩高校教諭

前回の東京オリンピックがあった1964年から５年間、新米の英語教師として伝統校にお世話になりました。当時水泳の中等女子全国大会で、５回も日本一という快挙に本校を導かれた大野薫平先生も、まだ教頭として学校の中心で、独身で女子教育に献身的な女性の先生方がまだおられて、良妻賢母育成を目指して、実に厳格な教育をされていたのが印象的でした。まだ女生徒の割合が都立高では当時一番多かった時代ですが、女子クラスなどの生徒は却って皆リラックスしていて、明るく、ちょっとした失敗にも笑ってくれ、駆け出しの男性教師をホッとさせてくれました。当時は１学級50人以上、その中で12～３人しかいない男子は、一見花園にいる気分かと思いきや、圧倒的な「女子力」には悩まされたようで、自分たちで結束することを覚え、50年経った今でもその絆は意外に固いように見えます。

最近の校舎は窓が小さく、生徒を閉じ込める箱で、校庭は網がかかったオリのようですが、当時の南校舎は南側が全面ガラスのドアになっていて、明るく、どこからでもベランダに出ることができる解放感があり、今ではまれな時計台もあったのが懐かしい方も多いと思います。

当時の卒業生Mさんは、芸大を出て、日本の唱歌を教えることに情熱を燃やしていますが、自作自演でこの校舎と思い出を懐かしく歌ってくれています。

(www.youtube.com/watch?v=tZ1BzV1QAQ0)

近況を少々。私も40年間様々な都立高の教壇に立ったあと、自由に英語のボランティア・ガイドをしながら、外国人との出会いを楽しんで11年になります。難民船で漂流し九死に一生を得て豪州で拾われ、そこで努力して成功したベトナム人カップル。動物保護のために、タイでサメと泳いで記録を残すカナダ人。「日本人は生魚を食べても本当に健康に異常がないのか？」と真剣に聞くインド人医師。母国戦時中でもウクライナから子供の「勉強」旅行にくる家族。車椅子の息子の新婚旅行に付き添ってきた両親は、旅行のあとで子供が生まれたというので大喜び。スペインでの家族旅行に招待してくれました。拙宅の汚い台所で、国から材料持参で郷土料理を作ってくれた新婚旅行のイタリア人も思い出です。東京に来る外国人を通して世界を覗くのも、普通の海外旅行では分からない人間的な発見があります。

(www.aizawa.2y.net)

スペイン人の若夫婦をガイド中の筆者。
昭和39年から44年まで南高で英語科教諭。
現在は外国人のボランティア・ガイドなど。

歴史発見　―昭和20年周辺の混乱期、母校に何が起きていたのか？―

# 母校は府立第四高女から都立南多摩高校へ

歴史発見チーム代表　井上　務（昭和44年卒）

## 先輩に感謝

テーマに迫るため、昭和18年から昭和21年の間に母校に入学された６名の先輩を取材しました。母校が「大」きく「変」わった「大変」な時が彷彿としてきました。

## 年々激しくなる戦争の影響は八王子にも

昭和18年４月入学の先輩。５月、アッツ島玉砕。同年７月に東京府は東京都に変わり、母校の名称も府立から東京都立第四高等女学校へと改称。昭和18年の入学生からは学制改革により４年で修了することも可能に。戦況厳しく、女子も勉強している場合ではなくなったのでしょう。父の戦死で希望通りの進路を断念した友の姿も。校庭の防空壕は最終的には数十に及んだようです。

昭和19年に入学した先輩。12歳の乙女たちの背中と胸には名札。日の丸ハチマキを巻いて学校工場に設置された旋盤やドリルなどで戦闘機や戦車の部品を作る日々が続き、軍需工場に「出勤」する生徒もいました。

大事な図書などが八王子市郊外に疎開。加住の小島宅や恩方の菱山宅などに運ばれました。生徒にも数冊ずつ学校図書を託し、焼失からの危険を分散。図書を預かった生徒たち一人一人が図書館となった訳です。

## 母校焼失、そして終戦へ

昭和20年８月２日未明、米軍機の八王子空襲で母校は全焼。野矢先生戦災死。空襲数日後、焼け跡の校庭に敵機３機来襲、防空壕に避難しきれずに地に身を伏せるしかなかった生徒たちが標的とされましたが幸いにも全員無事。そして８月15日、終戦。９月以降、雨が降ればお手上げの青空教室や僅かに焼け残った近隣の寺、第６・第８国民学校、高幡潤徳国民学校や青年クラブ等での授業が徐々に再開されていきました。先ず、戦時教材への墨塗り。授業は当初、全日だったそうですが、やがて午前と午後の２部制に。「おサツのお弁当さえ持参できない生徒さんが悲しい思いをしなくてすむようにとの配慮だったのでは？」と先輩は語っておりました。今も、紛争に巻き込まれ、充分に食べられない子供たちがいることを考えると心が痛みます。

## 校名が何度も変わる昭和20年代前半期

昭和21年、都立第四高等女学校を受験した先輩「落ちたら子守奉公だヨ！といわれた12歳でした」と笑いました。23年には都立第四女子新制高等学校併設中学校の３年生に。24年には校名から「女子」の文字が抜けて男女共学、都立第四新制高校１年生に。そして、25年には都立南多摩高校の生徒に。宝塚のような松・竹・梅・菊・桐・桜組のクラス名はＧＨＱの意向だったのでしょうか？ちょっと味気ない１組から７組に変わり、昭和27年に都立南多摩高校生として卒業。在校中に校名が４回変わるという目まぐるしさでした。

入学当初、衝立で６つに仕切られただけのバラック教室で授業。このバラック、校庭で拾われた焼けクギも使われていたようです。隣のクラスから声がもれ伝わってきました。衝立を片付ければあっという間に大教室に変身。その頃、校庭にはまだまだガラスの微細小片やクギが見つかり、これを拾うことが休み時間の日課でした。

昭和22年、甲州街道沿いに建てられた木造平屋建て校舎正

## 卒業証書が２枚ある？ 昭和18年入学組

昭和18年に入学した生徒は、戦後の学制改革などの影響により、41名の生徒が卒業証書を２枚持っているそうです。真相は昭和23年３月に都立第四高等女学校本科５年を修了した219名に卒業証書を授与、うち41名は校名変更した都立第四女子新制高校３学年に編入し、翌24年３月に新制高校の卒業証書も授与されました。

昭和23年に第四高女を卒業後、翌昭和24年に新制高校１期生として卒業した松組の生徒

会員名簿には確かに同じ卒業生の名前が２度記載されています。戦後目まぐるしく変わった学制と校名が為せる業と言えるでしょう。２枚の卒業証書の現物をどこかで拝見したいものです。

## 校名は、「八王子」「多摩」「陵東」･･･？

今、私たちの心にすっと落ち着いて馴染んでいる、美わしく逞しい「南多摩」の校名決定にも先人の皆さんのご苦労がたくさんあったようです。

当時、多摩地域は「都下」や「三多摩」と呼ばれ田舎のイメージがあったようで「南多摩」には若干の違和感があったらしく「第四」から「南多摩」に決まるまでの校名候補には「八王子」「多摩」「陵東」（御陵の東に位置するので）などが挙がったそうです。しかし、八王子を冠した校名が既にあったことや母校の建つ八王子がかつて南多摩郡にあったことなどから「南多摩」が採用されたようです。

そして、母校を母体にしてできた都立南多摩中等教育学校に。「南多摩」の選択は間違っていなかった！そう確信します。

戦後の校舎と甲州街道

## 「ル・ペシェ」にて

登戸駅から徒歩５分、昔、そこは桃の木が多かったそうで、フランス語で「桃の木」を意味する素敵なカフェでフランス菓子とコーヒーを楽しみながら昭和19年入学の先輩３名を取材。先輩たちは毎月、赤い扉の「ル・ペシェ」でミニ同窓会を長い間、継続開催しているというので驚きました。オーナーが同級生という心安さ、鎌倉や逗子などからの参加者も小田急線が利用できるという地の利を得てミニ同窓会は毎月盛り上がっているようです。

高尾山、箱根、日光、京都などに行った思い出、観劇会、映画教室で観た「石の花」「レ・ミゼラブル」の話し、八千草薫も岸田今日子も私たちと同じ“ヘチマ襟”の服を着ていたネ。現・平成天皇が皇太子時代に騎馬戦をされた場所で私たちはダンスを踊ったりしたけれどあの場所はどこだった？　権威ある「H氏賞」を受賞された桜井先生、担当教科以外に授業終了後に希望者にはフランス語もドイツ語も教えて下さった花岡先生、橋浦先生は熱弁だった！･･･先生方の印象は強烈に記憶されていました。先輩との語らいの中で登場された先生方のお名前はあまりに多く、ここにご紹介できず、残念至極です。

## 一橋大学兼松講堂

昭和21年入学の先輩は当時の花形スターであったソプラノ歌手、大谷洌子（おおたにきよこ）さんの歌を一橋大学兼松講堂で聴いたことが忘れられないと話されました。「蝶々夫人」の中の「我が子を残して」（最近は「さよなら、坊や」などと表現されているようです）を大谷さんが歌う際、たまたま保護者がお子さんと参加していたそうで、その子を舞台に上げ「我が子を残して」を熱唱。今も鮮明ですとお話ししてくださいました。ご自身もやがて教員になられた先輩は、ハチマキ（戦争）から平和・文化への教育に腐心された当時の先生方の意気込みを強く感じると語られました。染井能楽堂へ、歌舞伎座では楽屋から奈落までも見学させていただきましたとも。

大きな身体の、あの水泳の古橋選手や橋爪選手にも、廊下で何度もすれ違ったそうです。先輩の語り口からは、一流の方々を学校に招くことで多感な生徒たちにたくさんの触発を与えようとされた先生方に感謝あるのみですとの気持ちが溢れていました。今も続く合唱コンクールの淵源は当時の稲田泰先生を中心とした活動の中から生まれたと確信すると語られ、あるエピソードが紹介されました。併設中学３年生の時、伊豆韮山へ。宿の入り口にピアノを見つけた生徒たちは、皆が自然な形でピアノのまわりに集まり、合唱が始まったのだそうです。青春映画のワンシーンを観るような思いでそのお話しを伺いました。

## 世代の「世」には十が三つ

世代の「世」の中には十が三つある。その説に従い、一世代を三十年とすれば12歳で「第四」に入学した先輩たちは二世代以上に及ぶ交流を続けていらっしゃいます。学校で教えて貰ったことを全て忘れたあとでも残っているものが「教育」の成果かも？と指摘した方がおりましたが「さもありなん」と思わせられた今回の取材でした。

在校生たちも卒業後に先輩たちと同じような、否、それ以上の「教育」の成果を語る時がきっとくるのでしょう。卒業生として大いに期待し、大いに応援したいと感じた数週間（平成27年２月から３月に取材）でした。

**参考資料：**

南高100周年記念誌『湧水万古』
昭和23年卒会誌『萌える』
昭和25年卒会誌『母校が焼けた日』

# 躍進する南多摩中等教育学校の部活動

## 南多摩フィルハーモニー

本格的に管弦楽に取り組む南多摩フィル

「南多摩フィルハーモニー」は、今年から本格的に管弦楽に取り組み始めました。新しく管弦楽の形態を作るために、１期生を中心に何度も話し合いをもち様々なことを乗り越えてきました。

１年間の集大成として、平成27年３月26日、「八王子いちょうホール」で、中１から中５までの総勢83人で定期演奏会を行い、ドボルザークの交響曲第８番第１・第４楽章、シベリウスのフィンランディア他を演奏しました。これからも豊かな美しい音楽を目指して日々精進していきます。

## 陸上競技部

「陸上競技部」では、南多摩高校陸上競技部の伝統が、確かな形で受け継がれています。 平成26年８月に香川県で開催された第41回全国中学校陸上選手権大会では、中等３年生の酒井由吾くんが走り幅跳びにおいて６m94cmの自己新記録で、南多摩陸上部初の全日本チャンピオンになりました。また、平成26年度は、関東中学陸上優勝、東京都中学総体男子総合の部準優勝、女子リレー準優勝、ジュニアオリンピック初出場、八王子市学校対抗男女総合優勝、八王子市駅伝男子３位など、他にも数えきれないほどの成果を選手たちは残してくれました。南多摩高校最後の３年生の選手たちが、中等教育学校の後輩たちを力強く導いてくれました。インターハイロードから東京都駅伝へと繋がる「夢へチャレンジ」はこれからも続いていきます。部員全員の力で、今年も和歌山インターハイ・北海道全日中を目指していきます。

## 太鼓部

「太鼓部」は、平成20年の南多摩高校100周年の際、あかね会から寄贈された太鼓８台を有効に活用させていただこうと、中等教育学校開校の翌年の平成23年に起ちあがりました。中２に上がったばかりの１期生８人のスタートから４年。お陰様で、前期生30人、後期生20人の合計50人、年間演奏回数も25回を数えるほどの部になりました。

平成27年４月には、日本屈指の太鼓の祭である「成田太鼓祭」に参加することになりました。

躍進めざましい太鼓部の合同演奏

このような吉報をお知らせできる喜びを、部員・コーチ・顧問一同、噛みしめております。同時に、これに奢らず、太鼓の活動を通して、南多摩の教育目標である「人間力」の向上を地道に目指していきます。

## その他の部活動

その他の部活動も、運動部、文化部問わず、活発に活動し、多くの成果を挙げています。放課後や土日、長期休業中の本校グラウンド、体育館は、運動部の生徒たちでいつも賑やかです。雨天時には、校内でトレーニングを行う運動部の生徒たちの姿も見かけます。また、美術部と文化祭実行委員会コラボの門制作で本校文化祭特別賞受賞の美術部、大入り満員の理科室で実験・展示を成功させた科学部、レベルの高い台本に取り組んだ演劇部、一人で浴衣を着付けお点前を披露した茶道・日本文化部、各行事で表紙を任されるイラストクリエイト部、ラテン語の曲にも挑戦する合唱部と、文化部も頑張っています。

## 太鼓部(団体)と酒井由吾くんが表彰

平成26年度東京都教育委員会児童・生徒表彰では、太鼓部（団体）、陸上競技部の中等３年生酒井由吾くん（個人）が選出されました。

太鼓部は八丈太鼓の演奏を通した地域貢献で、酒井君は前述にもありますように第41回全国中学校陸上選手権大会・男子走り幅跳び第１位の結果で、表彰されました。

酒井くんが走り幅跳びで南多摩陸上部初の全日本中学チャンピオンに

（横井 明子、大井 晃史、今川 健司、吉田 寿美）

# 平成27年度大学入試 南多摩高校の合格状況

平成27年度入試　大学、短大の現役合格者数（のべ人数）の中間報告は以下のとおりです。

平成27年3月31日現在

**●国公立大学**　（　　）は昨年度の合格人数

| 大学名 | 人数 | 受験の種類 |
|---|---|---|
| 首都大 | 11 | 指定４，公募１，一般６ |
| 横浜国大 | 2 | 公募１，一般１ |
| 東京農工大 | 2 | ゼミナール入試１，一般１ |
| 都留文科大 | 1 | 公募 |
| 一橋大 | 1 | 一般 |
| お茶の水女子大 | 1 | 一般 |
| 信州大 | 1 | 一般 |
| 東京外語大 | 2 | 一般 |
| 福島大 | 1 | 一般 |
| 山口大 | 1 | 一般 |
| 東京学芸大 | 1 | 一般 |
| 東京海洋大 | 1 | 一般 |
| 埼玉大 | 1 | 一般（後期） |
| 茨城大 | 1 | 一般（後期） |
| 合計 | 27 | （19） |

**●私立大学**

| | | |
|---|---|---|
| 早稲田大 | 7 | 指定２，一般５ |
| 慶應大 | 1 | 一般 |
| 上智大 | 4 | 一般 |
| 東京理科大 | 2 | 一般 |
| 合計 | 14 | （20） |

| | | |
|---|---|---|
| 明治大 | 14 | 一般 |
| 青山学院大 | 11 | 一般 |
| 立教大 | 16 | 指定１ |
| 中央大 | 43 | 指定４ |
| 法政大 | 15 | 一般 |
| 学習院大 | 1 | 一般 |
| 津田塾大 | 1 | 指定１ |
| 合計 | 101 | （102） |

| | | |
|---|---|---|
| 日大 | 19 | 一般 |
| 東洋大 | 13 | 一般 |
| 駒澤大 | 9 | 一般 |
| 専修大 | 8 | 一般 |
| 合計 | 49 | （50） |

| | |
|---|---|
| 青山学院女子短大 | 2 |
| 麻布大 | 1 |
| 亜細亜大 | 5 |
| 大妻女子大 | 3 |
| 神奈川大 | 1 |
| 北里大 | 3 |
| 杏林大 | 2 |
| 工学院大 | 2 |
| 国学院大 | 7 |
| 国士舘大 | 3 |
| 駒沢女子大 | 1 |
| 実践女子大 | 3 |
| 芝浦工大 | 1 |
| 城西大 | 2 |
| 昭和女子大 | 2 |
| 昭和薬大 | 2 |
| 白梅学園大 | 3 |
| 白百合女子大 | 2 |
| 成蹊大 | 7 |
| 成城大 | 3 |
| 清泉女子大 | 1 |
| 創価大 | 3 |
| 大東文化大 | 2 |
| 玉川大 | 2 |
| 多摩美大 | 4 |
| 千葉工大 | 1 |
| 帝京大 | 5 |
| 帝京平成大 | 4 |
| 東海大 | 1 |
| 東京医療学院大 | 1 |
| 東京医療保健大 | 3 |
| 東京家政大 | 2 |
| 東京経大 | 3 |
| 東京工科大 | 6 |
| 東京純心大 | 1 |
| 東京女子大 | 1 |
| 東京都市大 | 4 |
| 東京農大 | 4 |
| 東京薬大 | 3 |
| 獨協大 | 2 |
| 日本社会事業大 | 1 |
| 日本女子大 | 3 |
| 日本体育大 | 2 |
| フェリス女大 | 1 |
| 武蔵大 | 7 |
| 武蔵野大 | 8 |
| 武蔵野美大 | 2 |
| 明治学院大 | 2 |
| 明治薬大 | 1 |
| 明星大 | 8 |
| 横浜薬大 | 1 |
| 合計 | 144 |

南多摩高校最後の高校生は、８クラスから４クラスになって３回目の生徒達です。全体数が半分になっても部活や行事に頑張る南高の伝統をしっかり引き継ぎつつ、受験においても例年通りの好成績をあげました。

国公立大学には27名の合格者を出し、卒業生数151名に対する割合は17．8％で、過去10年間で最高です。

（進路部　沢登　巌）

# 会 員 通 信

## 今年の箱根駅伝を走って

東海大学陸上部　**高木 登志夫** 平成24年卒

私は東海大学の選手として今年の箱根駅伝の９区を走りました。箱根駅伝は小学校から夢に見ていた舞台で、沿道の声援で並走している他の選手の呼吸音や自分の走る足音が聞こえなくなるほどで、改めてすごい舞台だと感じました。

私が箱根駅伝に出場することができたのは、南多摩高校に在校中に得たものを大学に入ってからも生かすことができたからだと思います。南多摩高校陸上競技部では「夢へチャレンジ！」という言葉を大切に活動していました。私は、大学入学当初から順風満帆の競技生活ではなく、最初は部の中でもかなり記録が遅い方で、故障も多く、自分に自信を持てなくなる時期も多々ありました。その時に南多摩高校で教わった「夢へチャレンジ！」の言葉を思い出し、立ち上がることができました。

また、高校で顧問の先生から「結果は勝っても負けても一瞬で過ぎ去るが、努力して成長した自分はこの後もずっと残っていく。それが陸上競技の真価なのだと思う。」ということを教わり、目先の結果だけにとらわれず、前向きに練習に取り組むことができました。

南多摩高校では多くの人と出会い、多くの事を学び、成長することができました。そんな母校に、走ることしかできませんが、これから少しでも恩返しをしていきたいです。南多摩高校で高校生活を送ることができて、本当に良かったです。

## 平凡な毎日でも…

**荒牧 佳純** 平成22年卒

高校を卒業して５年がたとうとしてる今、あの頃を思い出すと毎日が充実していたなと思う。

私は高校時代は生徒会役員としての活動や委員会活動、それから部活動とあらゆる活動をしていました。

生徒会では日々の仕事や部活動の予算を決めたり、部活動ではコンサート係として定期演奏会の企画などもしていました。

特別なことをしていたというわけではなかったので、あの頃は毎日が平凡に見えた。けれども、今考えてみると高校生の時に経験したことは今の私にとって、とても貴重で大切なものになっている。

あれから５年がたち、私は今、中学生に数学を教えています。高校で学んだこと、感じたことを活かして、出会う子どもたちに自分が学んだことを伝えていって少しでも子どもたちの将来のためになったらと思いながら教壇にたっています。

これからも高校で得たものを大切にして、日々勉強することを忘れずに、これからの人生を歩んでいこうと思います。

## 南高卒業生の今

南多摩高校教諭*　**見田 幸子** 平成２年卒

この原稿を書かせていただくにあたって、少ない交友関係の中で近況を聞いてみました。世代的に忙しい状況があり、賀状でのやり取りのみが細々と続いていましたが、これを機に連絡を取り合えたのも嬉しいことでした。

まず、主婦業に精を出されている人が多く、これは私も含め南高卒業生女子には晩婚晩産の傾向があるのではないかと思います。おかげさまで子供の年が近く子育て話を共有し合えることも多いです。お勤めの方は、自由業、公務員、大学助教授、外資系民間企業、出版社、福祉、･･･様々です。みんなそれなりに充実しているようです。

高校時代の友人たちとは、会えばすぐに高校生の頃のような気持ちに戻ってしまうのが不思議です。古びた校舎のこと、一クラスだけ飛び離れてしまった9組のこと、屋上で食べたお弁当のこと、名物の数学の先生や担任団の先生方のこと、大変にのんびりした自由な校風や、放課後の部活など･･･話題は尽きません。

さて、卒業生である私が、閉校のこの時期に南多摩高校で働けたことは貴重なご縁でした。次年度はいよいよ中等教育学校が完成しますが、友人たちの反応は「中等教育学校への移行が終わるんだね」というものが多数。正しく理解されていない、ともいえるのでしょうが、南高生らしい穏やかさに温かな気持ちになる私なのでした。

* 執筆当時

# 同窓生っていいなー

## 「古稀」を祝う学年同窓会で感動

**清水 美輝** 昭和38年卒

私たち昭和38年（第15期）卒業組は、これまでに一度も「学年同窓会」を行ったことがありませんでした。クラス会も８組（共学：４組　女子組：４組）あった中で、頻繁に行っている組があるものの、一度も行っていないクラスもありました。

たまたま「古稀」を迎えたことと、母校創立100周年を機に、あかね会常任委員、会計監査に昭和38年卒業組が４名在籍していることから話し合うなかで「卒業仲間の中には学年同窓会を望んでいる人がいる」「古稀を迎える歳になったので、これまで一度も行っていないからやりましょうよ」と、会話がはずみ、４名が発起人になって行うことになりました。しかし卒業以来、半世紀経っていることから、特に女子組には、どなたにクラスの幹事になっていただくか分からない等々試行錯誤を経て、昨年11月に行いました。

この51年振りに再開した学年同窓会で、私が感動したことを紹介させていただきます。

### １．「父の名前」を覚えてくれていました

会場の受付で、出席いただける仲間をお待ちしていると、中島(田中)尚二さんが現れ、再会するなり、いきなり「清水のお父さんは林蔵(りんぞう)さんだったよね」と。･･･びっくりです。彼とは１学年のときに同級で、２学年からクラスが違ったので、実に53年が経っても覚えていてくれました。そもそも同じクラスメートだった１学年で、彼の父上と私の父が五日市町（現あきる野市）出身ということを話したそうで、その会話をして以来ずっと覚えていてくれました。

### ２．「白馬岳」登山の写真を持参されて

２学年の夏休みに全校生対象で「白馬登山」をした記憶がかすかにあります。羽生弘さんとは、３年間クラスは違っていました。･･･なのに、「白馬登山」の際に、山頂で撮った２枚の写真を持参されました。１枚は小林真理子先生と古森（青木）知子さんが写っている写真で、もう１枚は、大雪渓をやっとの思いで登り、ホッとしている私の写真です。･･･52年も前で、しかもクラスが違うのに、お持ちいただきました。

### ３．立川駅での「数分の立ち話」

日本舞踊山藤流家元の山藤皓泰（本名：松本（武政）泰子）さんと、宴席で挨拶を交わすなり「清水さんとは、卒業して３年ほど経ったある日、（在学時代は一度も話したことはなかったけれど、私を覚えてくださっていたようで、文化使節団でソヴィエトに旅立つ前日に）立川駅構内ですれ違いにお会いし、立ち話をしたことを覚えています」と。･･･私は全く覚えていませんでしたが、卒業して３年後にお会いし、私が彼女の訪ソを励ましたものの、立ち話であったのに、彼女は覚えてくださっていました。

51年ぶりに再会された皆さん、それぞれに感動されたと存じますが、南多摩高校を卒業した「同窓生っていいなー」と私が感動したひとコマです。

最後に、学年同窓会で、私が発起人を代表した挨拶で引用した川柳を。

〇同窓会扉開けたら敬老会
〇元彼と亭主比べる同窓会
〇同窓会最後の一人になってやる

# 107年の集大成

**武田 捷矢** 平成27年卒

南多摩高校最後の学年である私達には２つの使命がありました。１つは先輩方が築いて下さった「歴史」「伝統」を集大成すること、もうひとつは南多摩中等教育学校へそれを伝えることです。

先輩方が長い年月をかけ築いた伝統とは何か、私は「自由な校風」だと解釈します。私は「自由な校風」であること、教育目標に人間力の育成を掲げることに魅力を感じ南高への入学を志望しました。三大行事では生徒が主体となり構想し、行動し、盛り上げて行きます。このことは、南高が他校に誇れる伝統だと思います。こうした自由な校風の中で日々を送ることで「高い志」「豊かな心」「国際性・社会性」が育まれ、それはそのまま「人間力」に直結します。合唱祭、文化祭、体育祭。この三大行事は年々進化し、この最後の年に集大成を迎えたと私は考えます。同時に南高の伝統も集大成出来たと思います。

中等生と関わることにとまどいを感じていた私の早合点を正し、彼らの魅力を伝え、更には伝統の継承に一役買ったのも三大行事でした。合唱祭では中等生の澄んだ歌声に息を呑み、高校生の迫力ある歌を披露し、互いに切磋琢磨しました。文化祭では毎年クオリティの高い高校３学年の演劇をはじめ、中夜祭などを通して中等生へ刺激を与えたと思います。そして体育祭では、団対抗種目や応援合戦を通じ、６学年が本当に一体となった姿を見ることが出来ました。この最後の祭で、伝統を伝え切ると共に私達の役目も終わったのかな、と感じることが出来ました。

「自由な校風」、この「自由」という言葉には責任が伴います。南多摩の生徒は責任を持って自由を全う出来ると思います。私は中等生にもこれが出来ると考えます。中等教育学校への移行に当たり、変革もあると思います。しかし、南高の伝統と言えども、南多摩を良くする為の変化なら厭わずに、また良くする為の闘いも厭わないで欲しい。私達南多摩高校が築いたものを中等教育学校なりに進化させ、これからの代へ継承して行って欲しいと思います。

# 同窓会活動

## ◆平成26年度のあかね会総会の開催

平成26年度のあかね会総会が、５月18日に京王八王子駅前の「ザ・ビー八王子（旧 八王子プラザホテル）」で、母校の校長・副校長、ＰＴＡ会長など学校関係者をお招きし、同窓生66名が出席して、盛会裏に開催されました。

第１部の定例総会は午前11時に始まり、溝口重郎さん（昭和36年卒）が議長を務め、平成25年度の事業報告・決算報告と会計監査報告が行われました。

続いて当年度の事業計画と予算案が提案され、満場の拍手で可決されました。予算の特色は、27年３月の南多摩高校閉校に関わる予算が計上され、閉校記念碑の建立をはじめ、閉校式典や祝う会、記念品などへの支援が審議・可決されました。

冒頭の挨拶に立った石川和昭会長から、南多摩高校の閉校への思いと、発展的に受け継ぐ南多摩中等教育学校への大きな期待が語られ、あかね会として今後の継続的な支援が表明されました。

第２部の講演会は、前国土地理院勤務の菱山剛秀さん（昭和44年卒）を講師として、正午から１時間行われました。演題は「地図で見る八王子」として、縄文の昔から戦国時代、江戸時代そして近世に至る八王子の文化と歴史を、地図のスライドを使って分かり易く語られました。母校の地・八王子に因んだ講演に、出席者一同が堪能しました。（講師は南多摩高校在学中に、八王子の宮田遺跡で「子抱き土偶」を発掘に携わっていました）。

第３部の懇親会は、午後1時から黒須隆一顧問の乾杯に始まり、会員相互の懇親の場がもたれました。卒業したばかりの新会員・佐久間裕君（平成26年卒）から、在学中は剣道部で４月に学芸大学１年生としてスタートしたことが報告されました。和やかな会も終わりに近づき、音楽家・丸山久さん（昭和44年卒）の指導により、童謡「夕焼け小焼け」や母校校歌を合唱して閉会となりました。

## ◆恒例の高尾山納涼会に35名が参加

恒例のあかね会納涼会が、８月24日（土）に高尾山薬王院で開催されました。常任委員に一般会員も加わって、35名が参加しました。猛暑の中をケーブルカーで山に登ると、思わず木々の間の涼風が頬を通り抜けます。

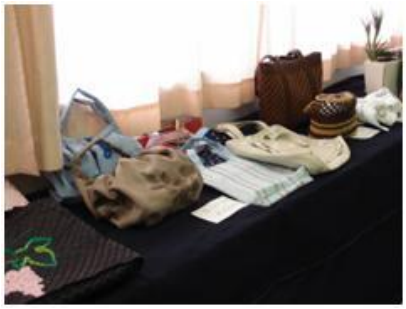
午前11時から一般会員を含め、第２回常任委員会が開かれました。あかね会活動をつぶさに見て、肌で感じていただく機会にもなりました。議題は、総会後の事業報告、９月初旬予定の母校文化祭「南魂祭」への会員作品の出展募集、展示内容、協力態勢等でした。

いよいよお楽しみの納涼会です。半澤邦彦副会長（昭和37年卒）の進行で、正午から高尾山薬王院の大山隆玄貫主（昭和28年卒）、石川和昭会長（昭和36年卒）の挨拶に続き、大島富子相談役（前副会長・昭和25年卒）の乾杯の音頭で、納涼会に入りました。味も好評の精進料理「高尾膳」を会食しながら、会員の皆さんから近況報告が行われ、同窓会への熱い思いなどが語られました。

## ◆母校文化祭で５回目の作品展示

南多摩高校と南多摩中等教育学校との合同文化祭「南魂祭」が、９月６～７日の土日に母校で開催されました。同窓会「あかね会」の作品展示は、西館玄関からの直ぐ上の、冷房のよく効いた２階教室で開かれました。

今回が南多摩高校として最後の文化祭で、卒業生作品展は今回が５回目となりました。会場の関係で前年より少なめでしたが、多くの同窓会員から出品が揃い、書道、絵画、陶芸、アクセサリー、袋物、織物、出版物など約40点近くが展示されました。



また、107年の歴史を綴った写真パネル、第四高女創立の和服姿から、明治・大正・昭和の制服をまとったモデル人形が一堂に飾られました。

今回の注目は、中田君代さん（昭和37年卒）の「折り紙教室」で、２日間連続で開催されました。中田さんが熱心に指導するポチ袋（リーフ）の折り紙に、同窓生や在校生たちが一生懸命挑戦し、静かな賑わいを見せていました。恒例の「あかね会クイズ」は教室前の２階テラスで行われ、中等生や学校見学の親子連れの子どもたちが、景品のお菓子を楽しみに挑戦していました。

## ◆「先輩に学ぶ」開催

平成26年12月16日に中等５年の生徒に対して、「先輩に学ぶ」が開催されました。前回、大好評であったことから黒須隆一あかね会顧問（前八王子市長・昭和35年卒）に再度ご足労を頂き、講師をお願いしました。テーマは、**挑戦！失敗を恐れるな！**

講演は、黒須先輩の元気いっぱいの「おはようございます！」でスタート。応じた後輩たちの返事はちょっぴり小声。「皆さん元気がもう一つですね、元気に挨拶しましょう。社会に出ると挨拶は大事ですヨ。良い挨拶は第一印象をよくしますからネ」と後輩たちに軽く先制パンチ（この“先制パンチ”の意味は文末で鮮明になるかと･･･）。「挨く」は「ひらく」、「拶る」は「せまる」と読むそうですが「心を挨いて相手に拶る」講演が始まりました。母校「南多摩」に縁してから、ほぼ60年。その60年間における数々の「挑戦」を僅か１時間に凝縮して熱く語って頂きました。

在校時代は柔道部、学生時代は経営学を学び、卒業後は家業に従事しつつレーサーに。「とことんやる」主義で1969年には日本グランプリでクラス優勝。その時の車が現在ミニカーで売られているとのお話しに加え、レーサー黒須の活躍ぶりはレーシング関連のある雑誌に「20世紀に残るドライバー100人」としてその名前が刻まれるまでになったことが語られると、会場からは「すご～い！」とか「へ～！」とのざわめき。1971年にはマカオグランプリで２位に。満足できる成果を得た先輩は、家業に専念。その時先輩は29歳。

それから数年後、次の「挑戦」が先輩を待ち構えていました。32歳の時「市議会に！」と推され立候補、見事に当選。３期目途中で都議会に「挑戦」、しかし惜敗。苦しい４年間の雌伏を経て再び都議会に「挑戦」。しかしまた惜敗。先輩の人生に大きな転機がやってきました。当時を思い返すと今でも涙が出そうになるという苦しい時を耐え、勝てる保証は何もありませんでしたが退路を断って三度目の「挑戦」。初志貫徹です。３回目の都議会挑戦の結果はなんとトップ当選。「あの時の苦労がなかったら、いまの自分はない」と。そして皆さんもご存知の通りその後は八王子市長に。いくつもの「前例がない」オンリーワンの実績を重ねた見事な市政を展開されました。先輩は本田宗一郎さんの「人生は、見たり、聞いたり、試したり」を引き、「今の人は、試すことをしません。だから良い成果は生まれないのです。失敗をおそれずに挑戦することが大事です。失敗をどう次に生かすかが大事です。私も、選挙の失敗を生かし、次に繋げることができました」と。また「人生には転機があります『人生には三度のチャンスがある』と言った人がいます。待っていてもチャンスは来ない。チャンスを得るには、努力もしなくてはいけないのです」とも。そして「皆さんの中には、自分が将来進む道を決めている人もいるでしょうが、自分の才能に気づいていない人が多くいると思います。自分の才能に気づき、『ここが生きる道』と言えるものを探し出してほしいのです。眠れる才能を見つけてください」と激励。

講演の締めくくりに「強くなければ生きていけない。優しくなければ、生きる資格がない」という、レイモンド・チャンドラーの言葉が紹介されました。これは、探偵小説「プレイバック」に登場するフィリップ・マーローという探偵の言葉として出てきます。『「強くなければ」社会を生きていくには難しい。しかし「優しさ」も兼備して欲しい』と。

間もなく73歳になるという先輩は今「ボクサー」を目指して週２回はジムに通っていると･･･。

レーサー、市議、苦節の都議挑戦時代、都議、市長、そして「これが今のボクサー」。先輩の「挑戦」は今も続いていました。

講演から、後輩たちは多くの刺激と多くの示唆を得たことと確信いたしました。

## ◆あかね会新年会開催

平成27年１月17日（土）、あかね会新年会が、母校近くの「ザ・ビー八王子」で35名が出席して開催されました。新年会の前に「第３回常任委員会」が開かれ、同窓会として、①３月末の南高閉校を記念し『閉校記念碑』を建立。②学校の閉校記念誌の作成を支援。③３月13日の卒業式、閉校式典の後に『南高閉校を惜しみ「南多摩」の継承を祝う会』を開催。④27年度の広報誌は南高閉校特集号として発行することなどが承認されました。新年会では、石川和昭会長から新年の抱負、３月の「南多摩」の継承を祝う会への参加要請の話しがありました。次に、押尾名誉会長（校長）から、母校卒業生、生徒の活躍が披露されました。正月の箱根駅伝では、卒業生の高木登志夫君（東海大学３年）が初めて復路９区を好走し、シード権獲得に大きく貢献しました。また、中等３年の男子生徒が全日本中学校陸上競技選手権大会の走り幅跳びで、自己新記録を跳んで優勝したことなど、母校の誇りとなる嬉しい話題が飛び出しました。

懇親会の席上で、昨年母校で発見された8mmフィルムの上映会が行われました。8mmフィルムをデジタル化してくださった永田峻さん（神奈川県在住）が紹介され、56年前の「昭和33年・南高50周年事業」を8mm映写機で上映していただきました。映画に映し出された先生や在りし日の生徒の姿を見て、会場内に歓声が上がりました。

# 母校への支援

平成20（2008）年に、母校は「創立100周年」を迎えました。その際の記念募金を原資として、南多摩百年太鼓、洋楽器（管弦楽器）、多摩産材の学習机・椅子などを、順次、母校に寄贈してきました。

それ以前から、生徒の進路指導・部活動の支援、卒業証書ホルダーの贈呈など、母校及び後輩生徒への援助を行ってきました。この度、南多摩高校が閉校となりましたが、「南多摩」を継承する南多摩中等教育学校及び生徒に、同窓会として継続的に支援を行ってまいります。

同時に、先の記念募金を活用して同窓会活動の活発化も図ってまいります。今号で第６号となる会報「みなみたま」の継続発行、同窓会ホームページの運営管理、母校文化祭への参加、会員交流事業として「高尾山納涼会」「新年会」を開催します。こうした取り組みを通じて、母校の出来事や同窓会活動の近況を会員の皆様に伝え、相互の交流と親睦を積極的に図ってまいります。

今回は、同窓会支援として、クスノキの記念碑とこの度の閉校記念碑の二つについて、改めてご報告します。

**クスノキの記念碑**は、「創立100周年」の折、平成22年５月のあかね会総会の際に建てられました。記念碑の碑文から、クスノキの来歴などを紹介します。

明治41年の開校時から、玄関南側に植えてあったクスノキは、昭和20年８月２日の八王子空襲により母校が焼けた際に焼け焦げ、傷つきました。

しかし、翌年の春、クスノキは見事に芽吹き、教職員や生徒はそれに勇気づけられ、校舎復興に全力を注ぎました。明治から大正、昭和、平成へと学校の100年のあゆみの中で、クスノキは母校や生徒の様子をずっと見守ってきました。このクスノキにちなんで、「困難に屈せず意思を貫く精神を受け継いでいく」という伝統のシンボルとして、記念碑が建てられました。正門を入って右側、体育館の手前に記念碑はあります。

**閉校記念碑**は、この度の閉校式典にあわせて建てられました。南多摩高校の閉校は、卒業生として一抹の寂しさを感じますが、「南多摩」の名称とともに、母校の良き伝統と校風は中等教育学校に継承されます。

第四高等女学校から南多摩高校への歴史は107年で幕を閉じますが、校歌に歌われた「美わしく　逞しき　南多摩」を赤御影石に刻んで、閉校記念碑としました。通用門（かつての校門）の左側には横川楳子女史の像、その向かいに閉校記念碑は建てられています。碑の揮毫は、相談役の大島富子さん（昭和25年卒業）です。

学校法人片柳学園
東京工科大学
【昭和35年卒】
学長 軽部征夫　理事 黒須隆一
<八王子キャンパス>
〒192-0982 東京都八王子市片倉町1404-1
TEL.042-637-2111(代)
<蒲田キャンパス>
〒144-8535 東京都大田区西蒲田5-23-22
TEL.03-6424-2111(代)
www.teu.ac.jp
併設校:日本工学院専門学校／日本工学院八王子専門学校

心のふるさと
祈りのお山
高尾山
薬王院 山主　大山 隆玄(昭和28年卒)
http://www.takaosan.or.jp

病院、施設の給食品専門問屋
増田屋
株式会社 増田禎司商店
代表取締役　増田太郎／増田敦子(昭和34年卒)
〒193-0801 八王子市川口町 1415
TEL:042-654-2222　FAX:042-654-5049
http://www.masudaya.1965.com

NAKANO
学校法人 八王子中村学園
なかの幼稚園
なかの幼稚園　そこは
子どもの世界です。
〒192-0041 八王子市中野上町 5-32-13
TEL:042-622-3001・FAX:042-624-3103
http://www.nakano-kd.ed.jp/
理事長 中村 健(昭和 46 年卒)

# 同窓会活動の参加募集

## 高尾山納涼会の参加者募集（8/22(土)）

暑い日本の夏。都会の暑さを忘れて、高尾山薬王院の「精進料理」を食べて夏バテを解消しませんか。

薬王院の大山隆玄貫主はあかね会同窓生です。元気な方は、早めに高尾山に登ってから参加もできます。７月、あかね会ホームページに募集要項を掲載します。会費は5,500円（予定）です。参加ご希望の方は下記あてにご連絡ください。

⇒連絡先　田中　ミホ　【電話】042-646-1155

## 母校文化祭の「作品展」出品者を

母校の創立100周年をきっかけに、あかね会は母校文化祭「南魂祭」に参加しています。日頃の趣味、文化・芸術の作品を制作されている方は、この機会にぜひ出品をお願いします。書道、絵画、写真、陶芸のほか著作物も展示します。お手伝いできる方もお申し出ください。

⇒連絡先　田中　ミホ　【電話】042-646-1155

## 「あかね会活動」に参加しませんか

あかね会活動は、主に常任委員会により運営されています。活動を円滑に進めるため、広報、行事運営など幾つかの役割分担をお願いしています。

常任委員は、卒業年次ごとに２名以上を選出していますが、代表のいない年次もあります。自薦、他薦を問いません。活動に参加してみたい方はお申し出ください。

⇒連絡先　溝口　猛　【電話】090-6489-5939

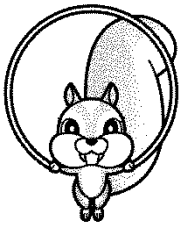
## 平成26年度のあかね会の活動紹介

平成26年度のあかね会活動は、５月の総会、４回の常任委員会、７回の役員会のほか、８月の高尾山納涼会、９月の母校文化祭「南魂祭」への参加、１月の新年会、３月の「南高閉校を惜しみ『南多摩』の継承を祝う会」などが開催されました。

活動の方針は、役員会・常任委員会で協議し進めています。平成26年度の常任委員会の開催状況は、下表のとおりです。

平成26年度　あかね会常任委員会開催状況

| 回 | 議題 |
|---|---|
| 第１回<br>６月７日 | 総会・懇親会の反省<br>高尾山納涼会の予定<br>母校文化祭「南魂祭」への参加<br>閉校記念事業の検討 |
| 第２回<br>８月23日 | 文化祭「南魂祭」への準備<br>文化祭の従事委員選定<br>「先輩に学ぶ」の予定<br>「高尾山納涼会」開催 |
| 第３回<br>１月17日 | 平成27年度広報の発行計画<br>閉校記念碑建立の概要<br>南高閉校を惜しみ「南多摩」の継承を祝う会の進め方<br>「あかね会新年会」開催 |
| 第４回<br>３月28日 | 南高閉校を惜しみ「南多摩」の継承を祝う会の実施状況<br>平成26年度事業進捗状況<br>平成27年度広報「みなみたま」案<br>平成27年度総会の準備 |



まちの歯ならびクリニック
Shindo Smile Care Clinic
八王子市 横山町23-2　でんわ：042-646-3686

NPO法人
八王子・台湾友好交流協会
理事長　黒　須　隆　一
（昭和35年卒）
〒192-0046 八王子市明神町4-1-2ストーク八王子205号
TEL・FAX 042-644-5580
携帯 090-6150-4965

明るい未来を拓く、元気な子供達を育てます。
社会福祉法人　相友会
浅川 長房 諏訪
保育園
諏訪 のぞみ乳児園
理事長　村松 一恵（昭和28年卒）
法人本部〒193-0812 八王子市諏訪町5 TEL：042-651-4555

高級オリジナルニット
色彩の魔術師
齋藤都世子作品ルーム
◇ 八王子・浅野サロン ◇
きもの浅野
浅野 常子（昭和34年卒）
〒192-0904 八王子市子安町 3-32-10-106
☎・FAX:042(646)9833／090-1422-1192

お住まいに健康と団欒をお届けする
ミャンマーチークフローリングと周辺造作材専門店

**ミャンマーチーク販売株式会社**

代表取締役　臼井　成美
臼井　実千恵（旧姓岡村　昭和46年卒）
〒160-0023　東京都新宿区西新宿3-8-4　BABAビル
TEL：03-5333-3055　FAX：03-5333-3077
http://www.myanmar.co.jp

有機バナナのパイオニア　ナチュラルヒーロー®

NATURALHERO　品質 Quality　安心 Relief

HIRO INTERNATIONAL　株式会社 ヒロインターナショナル
代表取締役　神藤宏昭（昭和35年卒）
〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-16-5（マニュライフプレイス渋谷3F）
電話：03-3406-1091　FAX：03-3406-1203　http://www.naturalhero.co.jp

不動産業（賃貸マンション・貸倉庫）
石田倉庫のアートな2日間

**石田産業有限会社**

代表取締役社長　石田　高章
常務取締役　石田　菊江（昭和27年卒）
〒190-0013 東京都立川市富士見町 2-32-2 石田産業ビル 2F
TEL：**042-522-2406**　FAX；：042-525-0483

**伊藤税務会計事務所**

税理士 伊藤　仁教
伊藤　幸子（昭和32年卒）
〒192-0045 八王子市大和田町3－6－21
TEL：(042)642-2719　FAX：(042)642-5034

医療法人社団　大島会

**大島耳鼻咽喉科クリニック**

院長　大島　清史／大島　富子(昭和 25 年卒)
〒192-0046 八王子市明神町 4-5-9
TEL：**042-642-8012**
http：//www.oshima-ent.com/

**有限会社 保寿産業**

代表取締役　小川　禎子
（旧姓 岸　昭和 31 年卒）
〒190-0023 立川市柴崎町1-9-32

TKC. KFS 推進事務所

**加藤　晃　税理士事務所**

●決算業務(法人税・所得税・消費税) ●相続税・贈与税申告
税理士・所長　加藤　晃（昭和38年卒）
〒192-0032　東京都八王子市石川町 733-4
TEL：042-644-1771　FAX：042-645-7372
http：//www.tkcnf.com/ntk/

ISO 9001 認証取得
エコアクション 21 認証取得

**黒須建設株式会社**

代表取締役社長　黒 須　弘 道
黒 須　俊 輔（平成20年卒）
本　社　〒192-0063　東京都八王子市元横山町 1—29—12
TEL. 042-642-5331 (代)　FAX. 042-642-5314
http://www.kurosukensetsu.com

コンピュータソフト開発＆運用

**（有）ライズ**

代表取締役　中村　晋也（昭和53年卒）
〒192-0066　八王子市本町30-6（N-Twoビル3F）
電話：042-620-5425　FAX：042-689-4149

医療法人社団　平雄会

**にしさこ　レディーズ　クリニック**　院長　西迫　潤
**にしさこ　こども　クリニック**　院長　西迫　真
総務長　西迫　洋美(旧性大塚　昭和36年卒)
〒252-0103　神奈川県相模原市緑区原宿南 2-39-7
電話：042-782-4135　FAX：042-782-5058
http://www.nishisako-cl.jp/

一級建築士事務所

**株式会社 浜中企画**

浜中　賢司（昭和44年卒）
〒193-0801 八王子市川口町 3411
電話：042(654)4325　FAX:042(654)6128
mail：hamanaka@tokyo.email.ne.jp

酒類業務用卸

**株式会社 鶴屋**

代表取締役　福山　雅己（昭和元年卒）
本社：〒192-0085 東京都八王子市中町 2-18
TEL：042-642-7000 代　FAX：042-645-1607

南多摩高校　平成３年 卒業　演歌歌手
「よっしゃよっしゃ！ソーランおんな節」
歌手業を軸に観光旅館業とカラオケ喫茶を始めました
富士吉田市　富士山リゾート&ビジネスホテル
ホテルベル鐘山（かねやま）
八王子北口 徒歩5分
カラオケ スナック プラネット
昼カラ 12：00～17：00　夜スナック 19：00～25：00
（有）オフィスめぐみ・伊達めぐみ後援会事務局
八王子市中野上町 5-14-1　TEL 042-622-9932
http://date-megumi.net/
伊達めぐみ
日本クラウン

Sankyosha
刷新ing
お任せ下さい！印刷のすべて。
取締役副社長　野口 冨巳子（昭和35年卒）
有限会社 三共社
〒192-0041 東京都八王子市中野上町 2-29-1
TEL.(042) 625-8325　FAX.(042) 625-8369
http://www.san-p.co.jp

法あるところに救済あり！
司法書士・行政書士　空衣（そらい）事務所
みなさまとお会いしたいと思っています
代表　入沢　修自(平成5年卒)
〒206-0011 東京都多摩市関戸4－23－1 関戸ビル301
電話:042-389-5570　Fax:042-389-0755
http://www.sorai-law.com

墓所のご案内いたします◇心を込めてお作りします
（有）渡辺石材店
専務取締役 氏家 雅子(旧姓 渡辺) 昭和51年卒
創業90年 母校近く、母娘共に南高の卒業生です！
〒192-0046 八王子市明神町1-25-1
電話:042-643-0213　FAX:042-643-8933
www.watanabesekizai.co.jp

医療法人社団　三真会
勝田医院
泌尿器科・内科・外科
院長　勝田真行／勝田三枝子(旧姓石森 昭和33年卒)
〒193-0803 八王子市楢原町 556—1
電話:042(625)2727　FAX：042(625)2700
〔休診日:日・祝、木・土の午後〕

ダンスウェア・シューズ
(ソシアルダンス・フォークダンス・バレエ)
CHAT チャット八王子
店 長　粕谷　和子 (昭和35年卒)
〒192-0085 八王子市中町 12-8
TEL・FAX：042-626-1255
〔定休日：水・日曜　営業時間：12:00～17:00〕

開かれた寺をめざして！
千人同心ゆかりの寺
宗教法人 曹洞宗興岳寺
寺院住職　土井 俊玄(旧名 晃) 昭和29年卒
〒193-0835 東京都八王子市千人町1-2-8
電話:042-661-5268　FAX:042-661-5357

医療法人社団 真歯会
常盤矯正歯科医院
理事長:常盤 肇　　理事:常盤 正臣(昭和 31 年卒)
〒160-0022 東京都新宿区新宿 4-3-22 安藤ビル 5F
電話:03-5363-1182　FAX:03-5363-1173
フリーダイヤル:0120-755-182
http://www.tokiwaoc.com

FiX HAIR CLINIC
美容室
Fix・ヘアークリニック
有限会社 フィックス
代表取締役　西村二三美(昭和51年卒)
〒192-0046八王子市明神町4-8-13(SICビル2F)京王八王子駅1分
電話:042-642-5898　FAX:042-642-5898
www.fix-cl.com
※広報「みなみたま」を見たと言って頂ければ、技術料 20%を割引します

家庭フランス料理とお菓子教室
クッキングサロン フェルミエール
主 宰　糠信 和代
〒192-0046 八王子市明神町４－２－９－８０１
電 話:042-646-1469　Fax:042-646-1469
サロンでフランスコース料理とワインを楽しんでいただきます

皮膚科・アレルギー科
城山右田医院
院長　村田 恭子／右田 貞子(昭和 26 年卒)
〒252-0105 神奈川県相模原市緑区久保沢 1-2-7
TEL:042-782-2120

同窓生の皆さん、お気軽にご相談ください
弁護士 森　保 彦(昭和38年卒)
森田・森法律事務所
〒160-0004 東京都新宿区四谷2-8
コーポ・クローバー駒井 504 号
TEL:03-3355-4021　FAX:03-3355-4022

# 5月17日の「平成27年度あかね会総会」にご出席ください

同窓会「あかね会」は、毎年、５月の第３日曜日に定期総会を開催します。（あかね会規約第７条）

３月13日に、南多摩高等学校の「閉校式典」が行なわれ、４月から、これを受け継ぐ南多摩中等教育学校が１年から６年生まで揃うこととなります。

この機会に、一度母校を見学しながら、定期総会にお越しになりませんか。奮ってご参加ください。

## 平成27年度あかね会定期総会

【日時】平成27年５月17日（日）11時～15時
【場所】ホテル「ザ・ビー八王子」
（旧八王子プラザホテル）
京王八王子駅前　☎042-646-0111
【懇親会費】５千円（当日徴収します）
【プログラム】

**総会**　11時～12時
平成26年度事業報告・決算
平成27年度事業計画・予算、役員改選

**講演会**　12時～13時
講師　**福島雪男氏**（昭和35年卒業）
「アメリカ合衆国横断ドライブの旅」

**懇親会**　13時～15時
昼食、懇談、新入会員の紹介等

【申込方法】常任委員を通じてお申込みください。
又は、下記へ５月11日(月)までにご連絡ください。
【申込先】　田中ミホ　☎042-646-1155
溝口　猛　☎090-6489-5939

# 「あかね会活動協力金」のお願い

この度のあかね会広報誌「みなみたま」第６号の発行は、卒業生会員（２万９千名弱）のうち物故者、消息不明の方を除く１万８千名の方にお送りしました。

これまで、主に会報発送の郵送料等の協賛金を「広報協力金」としてお願いしましたが、今回から「活動協力金」として、広く同窓会活動のご協賛を得る目的で、ご協賛をお願いすることとしました。あくまでもご協力は任意ですので、お志のある方はよろしくお願いします。

「活動協力金」は、従来のように広報発送経費やその他の母校支援等への資金として、活用させていただきます。１口千円とし、できますれば、２口以上のご協力をいただきますと、なお幸いです。

# 住所変更の際には、あかね会にご一報ください

毎年、広報誌を発行しますと、多数の戻り便が発生しています。会員の皆様にご住所やお名前の変更がありましたときは、あかね会あてにご連絡ください。

あかね会に対するお問い合わせ等もこちらにお願いします。

⇒【メール】meibo@akanekai.org
【郵　便】〒192－8562　八王子市明神町4-20-1
都立南多摩中等教育学校内　あかね会名簿担当あて
【電　話】　野口冨巳子　042-625-8325（三共社内）

## 編集後記

明治41年に東京府立第四高等女学校として創設され、107年の歴史を刻んだ東京都立南多摩高等学校は、今年３月をもって閉校となりました。しかし、校舎や校庭など学校の施設は、５年前に新たに設立された東京都立南多摩中等教育学校に引き継がれます。

南多摩高校最後となった今年の卒業生は、南多摩中等教育学校の後輩たちとともに、３年間を過ごす中で南多摩高校の伝統を「南多摩」の名とともに南多摩中等教育学校の後輩に引き継いでくれました。府立第四高等女学校の第一回卒業生から今日まで、南多摩高校の歴史とともに歩んできた同窓会は、こうした後輩たちの想いを大切にし、今後は南多摩中等教育学校を母校として継続して参ります。今年度は南多摩中等教育学校の第一期卒業生が送り出され、同窓会としては南多摩中等教育学校の最初の卒業生を迎えることになります。

今号は、たくさんの卒業生から在校時代の思い出を寄せていただきました。

第四高等女学校、南多摩高等学校から新たな母校となった南多摩中等教育学校へ、全ての卒業生の架け橋となることを願い、今号を編集させていただきました。　（菱山）